

グローバル・フォーラム
「第 12 回アフリカ政策パネル」
メモ

2026 年 8 月 4 日
グローバル・フォーラム(GFJ)

このほど、当フォーラムの「アフリカ政策パネル」はその第 12 回目となる「アフリカ政策パネル」を、江端希之京都大学アフリカ地域研究資料センター連携研究員および村津蘭東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教を外部講師にお迎えし、下記 1.~4.の通り開催しました。その主な議論概要は、下記 5.のとおりです。

記

1. 日 時 : 2026 年 8 月 4 日 (火) 13 時より 14 時 30 分まで
2. 開催形式: ZOOM ウェビナーによるオンライン会合
3. 使用言語: 日本語
4. 出席者: 9 名

[外部講師]	江端 希之	京都大学アフリカ地域研究資料センター連携研究員
	村津 蘭	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
[主 査]	遠藤 貢	東京大学教授
[顧 問]	北野 尚宏	早稲田大学教授
[メンバー]	青山 瑠妙	早稲田大学教授
	阪本 拓人	東京大学教授
	武内 進一	東京外国語大学教授

(メンバー五十音順)

[GFJ]	渡辺 まゆ	GFJ 代表世話人/JFIR 理事長
	高畑 洋平	GFJ 執行世話人/JFIR 上席研究員

5. 議論概要:

本パネルはまず、高畑洋平 GFJ 執行世話人の挨拶に始まり、次いで、遠藤貢東京大学教授による趣旨説明、その後、外部講師の江端希之京都大学アフリカ地域研究資料センター連携研究員および村津蘭東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教による報告の順で開催されました。主な議論概要については、次のとおりです。

(1) 江端希之氏による報告: 「アフリカと日本を繋ぐ「神社」の世界 オルタナティブな世界の在り方をマダガスカル・ドゥアニ信仰に探る」

(イ) 日本とマダガスカルをつなぐ在来信仰

マダガスカルには、「ドゥアニ」と呼ばれる精霊や王霊などを祀る在来の聖地が存在する。江端氏は、マダガスカルで足掛け 7 年に渡るフィールドワークを行い、自ら現地の信仰実践に参加しながら、ドゥアニ信仰を研究してきた。日本の神道とマダガスカルのドゥアニ信仰は、歴史的・社会的背景こそ異なるものの、多神教的、アニミズム的な宗教実践という点で共通性がある。こうした共通性に着目し、日本とアフリカを精神文化の面から断絶したものとしてではなく、つながりを持つものとして捉えることが重要である。

マダガスカルではキリスト教が広く普及しているが、キリスト教徒でありながら伝統宗教や民間信仰を同時に実践する人も多くみられる。また、祖先の遺骨を定期的に墓から取り出して布を取り替え、祖先との再会を祝うファマディハナなど、祖先とのつながりを重視する文化も存在する。こうした宗教実践は、複数の信仰や世界観が共存するマダガスカル社会の特徴を示している。

(ロ) ドゥアニ信仰とその発展

ドゥアニでは、過去の王や偉人の霊、神話的な先住民の霊、人魚や小人などの精霊、水源、巨石、樹木など、多様な存在が祭祀の対象となっている。これらの祭祀対象は、参拝者や霊媒師に憑依する存在とも考えられており、ドゥアニでは憑依儀礼を通じてお告げを受けたり、治療を行ったりする実践がみられる。

近年、特に中央高原のイメリナ地方では、ドゥアニへの巡礼者が増えるとともに、新たなドゥアニが生まれ、既存の施設も拡張されている。もともと岩や水場、樹木などのみであった聖地に祭壇が設けられ、やがて社殿が建設されるなど、聖地そのものが発展していく事例もみられる。その背景には、憑依儀礼を通じて祭祀対象となる神や精霊が、より立派な社殿を建てるよう信徒に求めると解釈される場合があることも関係している。このように、ドゥアニ信仰では、新しい神や精霊、神話が現在進行形で生み出されている点に大きな特徴がある。

(ハ) ドゥアニを支える人々と越境する信仰

ドゥアニの運営と祭祀を担うのは、「ピアンジュ」と呼ばれる祭司である。その役割は、神社の運営と祭祀を担う日本の神職とも共通する部分がある。一方、祭司とは別に、霊媒師や伝統治療師、占星術師などを兼ねる宗教的リーダーがおり、それぞれが信徒集団を率いて複数のドゥアニを巡礼する。一般の参拝者も、病気治療をはじめとする様々な現世利益を求めてドゥアニを訪れる。

信仰はマダガスカル国内にとどまらず、レユニオン、モーリシャス、マヨット、コモロ、セーシェルなど周辺地域にも広がっている。これらの地域から信徒集団が国境を越えてマダガスカルのドゥアニを巡礼するなど、民族や宗教、国境を越えた信仰圏が形成されている。また、ドゥアニの憑依儀礼には様々な社会階層や背景を持つ人々が参加しており、かつての社会階層を越えて人々が関わることのできる場としての側面もある。

(ニ) 日本神道との共通性と相違点

日本の神社とマダガスカルのドゥアニには、現世利益を求めて参拝すること、参拝前に身を清めて供物を捧げること、人間の祖先や歴史上の人物を神聖な存在として祀ること、さらに水源、巨石、樹木など場所や物自体に霊的な力を認めることなど、多くの共通点がある。また、それぞれの祭祀対象に固有の性格があり、学問や勝負事など異なる分野の霊験が期待されるという多神教的な特徴も共通している。

一方、現在の日本の神社では歴史と伝統を持つ既存の聖地が重視される傾向があるのに対し、マダガスカルでは現在も新しい精霊や神々が現れ、新しいドゥアニが形成されている。憑依儀礼を通じて新たな神話が生み出され、それが聖地の発展につながっていくという「動的」な性格が、現在のドゥアニ信仰を特徴づけている。

(ホ) 「真実の複数性」と多神論的な世界観

ドゥアニでは、それぞれの憑依儀礼で異なる神話やお告げが語られ、その内容が互いに矛盾する場合もある。しかし、祭司たちはいずれか一つを正しいものとして選択し、その他を否定するのではなく、それぞれを異なる文脈における真実として受け入れる。ここには、複数の異なる世界観を同時に受け入れ、それらを必ずしも一つに統合しようとししない「真実の複数性」を認める姿勢がみられる。

こうした考え方は、異なる次元の事象を別々の文脈で同時に受け入れ、それらを矛盾するものとはみなさないマダガスカル社会の認識のあり方とも関係している。江端氏は、このような姿勢には、日本の多神教的・アニミズム的な文化との共通基盤があると指摘した。一つの世界観や価値観へ統合するのではなく、複数の世界観の間を切り替えながら、異なる存在が併存することを受け入れるあり方に、多神論的なオルタナティブな世界の可能性を見いだすことができる。

(2) 村津蘭氏による報告：「アフリカのペンテコステ・カリスマ系教会と妖術」

(イ) アフリカにおけるキリスト教の拡大

アフリカでは、在来宗教が現在も重要な役割を果たしている一方、人口規模ではキリスト教やイスラム教が大きな割合を占めている。とりわけサブサハラ・アフリカでは今後もキリスト教人

口の増加が見込まれており、世界のキリスト教におけるアフリカの重要性は一層高まると考えられている。

報告者が調査を行ってきた西アフリカのベナンでも、南部を中心にキリスト教が広く信仰される一方、在来信仰であるヴォドゥンも根強く存在している。ヴォドゥンはハイチのブードゥーなどの源流の一つともされ、近年はベナンの文化的・観光的資源としても位置づけられている。その一方で、キリスト教、とりわけ新興の教会の中では、ヴォドゥンの神々や妖術を「悪魔」として捉える傾向もみられる。

(ロ) ペンテコステ・カリスマ系教会の発展と特徴

アフリカへのキリスト教の浸透は、植民地化に伴う宣教、アフリカ人自身による独立教会の形成、そして1970年代から1980年代以降におけるペンテコステ・カリスマ系教会の急速な拡大という流れで捉えることができる。植民地期の教会が学校や病院などの設立と結びつきながら発展したのに対し、独立教会では、アフリカ人自身が教会運営の主体となることや、癒し、預言、カリスマ的権威などが重視された。

その後急速に拡大したペンテコステ・カリスマ系教会では、異言、癒し、奇跡などの「聖霊の賜物」を身体的に経験することが重要視される。また、神と悪魔との間の「霊的戦争」という世界観や、信仰や努力を通じて経済的・社会的成功がもたらされるとする「繁栄の神学」も特徴である。さらに、カリスマ的な宗教指導者を中心とする大規模な教会、テレビなどのメディアの積極的利用、現代的な音楽やファッション、国境を越えた信徒ネットワークなどを通じて影響力を拡大してきた。

中には、住宅や大学、娯楽施設、発電設備などを備えた大規模な宗教施設を形成する教会もある。こうした教会にはアフリカ域内だけでなく、ディアスポラを含む世界各地から人々が集まり、宗教のみならず社会、経済、観光など様々な面で影響を及ぼしている。

(ハ) 「悪魔」と妖術をめぐる社会的背景

ペンテコステ・カリスマ系教会では、悪からの解放が強く訴えられ、その「悪」として在来宗教の神々や妖術師が位置づけられることがある。アフリカにおける妖術は古くから人類学研究の対象となってきたが、1980年代後半から1990年代にかけて、その言説が再び活発化したことを背景に、新たな研究が展開された。

こうした研究では、妖術を単なる伝統的な迷信として捉えるのではなく、急速な社会経済的変化や格差を人々が理解するための論理として捉える。例えば、周囲の人間が突然富を獲得した場合、その背景を妖術や儀礼によって説明する言説が生まれる。冷戦終結後に市場経済化や新自由主義的改革が進み、人々の生活や富の分配が大きく変化する中で、妖術は近代化によって消滅するのではなく、むしろ近代的な社会変動を理解する枠組みの一つとして存続してきた。

この観点からは、近代化を伝統的な宗教観からの脱却として一方向的に理解することはできない。近代社会そのものが妖術やオカルト的な世界観を内包しながら形成されているという、「複数の近代」のあり方を考える必要がある。

(ニ) ペンテコステ・カリスマ系教会と政治・社会

ペンテコステ・カリスマ系教会の拡大は、アフリカ諸国における国家や社会の変容とも密接に関係している。1980年代以降、従来の国家による統治やパトロン・クライアント関係が弱まる中で、教会は市民社会を形成する主体の一つとして役割を拡大してきた。また、多党制への移行など民主化が進む中で、教会が政治的価値観の形成に与えた影響も指摘されている。

特にペンテコステ・カリスマ系教会では、自立、勤労、自己責任、個人による選択などが重視される。また、「born again（生まれ変わる）」という考え方のもと、過去との決別や、従来の親族関係から距離を取り、新たな個人として生きることが強調される。こうした教会で形成される個人を重視する価値観が、民主主義や市民社会を支える主体形成につながるなどの議論がある。

同時に、国家が十分に提供できなくなった公共サービスを、教会やNGO、国際機関など多様な主体が担うようになったことも重要である。教会は宗教活動だけでなく、人々の共同体形成や生活支援の場として機能し、勤勉や節制、成功を重視する価値観を信徒に浸透させている。その意味で、教会は新自由主義的な社会に適応する市民を形成する場としての側面を持つとも論じられている。

(ホ) 宗教そのものを政治的实践として捉える視点

アフリカのキリスト教研究では、宗教を政治や経済の変化に対する単なる「反応」として分析するのではなく、宗教実践そのものを政治的な営みとして捉える視点も提示されている。例えば、国家の汚職、貧困、犯罪などが制度上の問題だけではなく、「罪」や「悪魔」といった霊的な問題として理解される場合がある。そして、信徒が罪を告白し、悪霊から解放され、新たな自己を形成することは、社会や国家を再構築するための主体形成にもつながると考えられる。

このような視点に立てば、宗教と政治をあらかじめ別々の領域として区別すること自体を問い直す必要がある。宗教を社会・政治変動の結果としてのみ理解するのではなく、人々の価値観や主体性、社会関係を作り出す独自の政治的实践として分析することが重要である。

(ヘ) ベナンの教会における悪魔祓いの実践

報告者がベナンで調査した教会は、2009年以降に急速に拡大した宗教運動で、16歳の少女に聖霊が宿ったとして、新たなカトリックのあり方を掲げて発展した。一見すると特異な教会であるが、「神が悪魔を滅ぼすために現れた」という世界観は、アフリカで広く発展してきたペンテコステ・カリスマ系教会の「霊的戦争」と共通している。

一方、実際の信徒が教会を訪れる理由は、必ずしも政治や社会への不満として説明できるものではない。病気が治った経験を契機に入信する人も多く、悪魔や妖術についても、抽象的に「伝統社会から解放されたい」という願望ではなく、義母など具体的な人物との人間関係の問題として経験される場合がある。このため、人々の宗教実践を政治・近代化などの大きな枠組みだけから説明するのではなく、個々の経験や語りに即して理解する必要がある。

また、フィールドワークからは、悪魔祓いという実践そのものが、人々に妖術の存在を認識させ、その対象や意味を拡張していく側面も確認された。悪魔祓いは、既に存在する妖術への単なる対応ではなく、誰が妖術を行っているのかを判断し、妖術について語る主体を専門家から一般の信徒へと広げるなど、妖術をめぐる新たな現実を作り出す実践でもと考えられる。

(3) 質疑応答

・ペンテコステ・カリスマ系教会と国家の関係

Q. 阪本メンバー：大学や発電設備などを有するほど巨大化したペンテコステ・カリスマ系教会も存在する中で、こうした教会と国家との間に緊張関係は生じているのか。

A. 村津氏：ペンテコステ・カリスマ系教会には、巨大なメガチャーチから小規模な教会まで多様な形態がある。大規模な教会は政治的影響力も有しているが、国家と対立するというより、政治家との協力関係が形成される場合が多くみられる。政治家側は、影響力のある牧師や教会との関係を通じて信徒からの支持を期待し、教会側も政治家との関係を活用する。一方、教会指導者による過度な富の蓄積や宗教活動のビジネス化への批判もみられる。

・日本神道とドゥアニ信仰の共通性

Q. 阪本メンバー：日本神道とマダガスカル人のドゥアニ信仰に共通性がみられるのはなぜか。歴史的なつながりや社会文化的な背景はあるのか。

A. 江端氏：両者の間に直接的な文化交流があったことを示す明確な記録が存在するわけではない。ただし、マダガスカル人の祖先の一部が現在のインドネシア周辺から移住してきたことから、東南アジアを介した文化的な源流が一つの可能性として考えられる。また、それとは別に、アニミズム的な観念が世界各地で自然発生的に形成され、人間の祖先や自然物に霊的な力を見いだすといった共通の基層文化から、類似した宗教観がそれぞれ成立した可能性も考えられる。

・宗教実践と国家の「救済」

Q. 武内メンバー：ペンテコステ・カリスマ系教会の宗教実践が国家の救済につながるという議論について、実際の信徒は政治家や国家のあり方をどのように捉えているのか。

A. 村津氏：ペンテコステ・カリスマ系教会では、国家の腐敗などを悪魔的な力の影響として理解し、それから解放される必要があるとする考え方がある。ベナンで調査した教会でも、当時の大統領への批判が悪魔と結びつけて語られ、その状況からの解放を求めて信徒が祈る実践がみられた。個人の宗教実践が直接国家を改善するという言説が明確に語られるわけではないが、宗教的

に正しいとされる指導者を支持することが国家の改善にもつながるという感覚は存在していたと考えられる。

• ドゥアニ信仰と国家の関係

Q. 武内メンバー：現在のマダガスカルにおいて、ドゥアニ信仰は国家とどのような関係を形成しているのか。日本における国家と神道との共通点や相違点も含めて伺いたい。

A. 江端氏：19世紀のメリナ王国では、近代国家として制度を整備する過程で伝統宗教も国家的な宗教として組織化された。しかし、その後王室がプロテスタントに改宗したことで国家的な伝統宗教は衰退し、フランス植民地期には民間信仰として存続した。独立後には宗教の自由化と文化復興の動きの中でドゥアニ信仰が再び活発化し、現在では国旗を掲げる聖地も多くみられる。また、ドゥアニ信仰と密接な関係を持つ伝統治療師が国家公認制度に組み込まれるなど、間接的に国家から承認されるようになっている。近年では国家儀礼にドゥアニの祭司や霊媒師が参加する事例もみられる一方、政治的影響力を持つキリスト教会との間に新たな緊張も生じている。西部のサカラバでは王家が現在まで存続し、政治的権力は持たないものの、王が祭祀を主催する伝統が維持されている。

• ドゥアニ信仰の動態性

Q. 遠藤主査：日本の神社が比較的静態的な宗教実践となっている一方、マダガスカルのドゥアニでは新たな神や神話が現在も生み出されている。この違いは何によって生じたのか。

A. 江端氏：日本では、明治期に国家神道として制度化される過程で、かつて各地で行われていた憑依などの動態的な宗教実践が「迷信」として排除された。これに対してマダガスカルでは、植民地政府が反乱など政治的な問題につながらない限り、憑依儀礼を含む民間の伝統信仰を基本的に黙認した。そのため、キリスト教化が進む一方でもドゥアニの動態的な宗教実践は存続し、独立後の宗教自由化によって再び表立って発展するようになった。こうした歴史的経緯の違いが、現在の両者の性格の違いにつながっていると考えられる。

• 米国の宗教勢力とアフリカへの影響

Q. 遠藤主査：近年、米国では福音派など宗教的に保守的な勢力が政治的影響力を持っているが、宗教を介した米国からアフリカへの影響をどのように捉えているか。

A. 村津氏：福音派とペンテコステ・カリスマ系教会は必ずしも同一ではないが、妊娠中絶やLGBTQをめぐる問題などについて、米国の保守的な宗教団体や政治勢力が資金などを通じてアフリカにも影響を及ぼしている側面がある。こうした価値観はもともとアフリカ社会にも一定程度存在していた。また、米国の援助政策の変化は、キリスト教系援助団体を含む国際協力の活動にも影響し得る。ただし、現在のアフリカ社会にどの程度の影響を与えているのかについては、さらに検討する必要がある。

(文責、在研究本部)